

【目的】障がい者に歩みよろうとする人,しない人の共感性について「仮説 1.共感的関心(他者の不運な感情体験に対し,自分も同じような気持ちになり,他者の状況に対応した他者志向の温かい気持ちを持つ)が高い者は,障がい者に歩みよろうとする傾向が高い」,「仮説 2.共感的関心が高い者は,障がい者への接触頻度が高い」を検討することを目的とした。

【方法】平成 21 年 10 月中,淑徳大学に在籍する学生 352 名(男性 119 名,女性 233 名)に質問紙を実施した。この質問紙には登張(2003)による多次元共感尺度,障がい者への歩みよりに重要であると考えた知識を得ること,支援したいと考えること,好意を持つという 3 点をたずねる項目を独自に製作し,障がい者への歩みより尺度として使用した。これに加え,家族,友人,ボランティア,地域の障がい者を持つ者との接触頻度をたずねる項目を用いた。

【結果】障がい者への歩みより尺度を因子分析した結果「支援関心」,「知識経験」,「好意意識」が因子得点として得られた。仮説 1 を検証するため,障がい者への歩みより尺度から得られた因子得点と多次元共感尺度の相関分析を行ったところ,共感的関心と障がい者への歩みより尺度全体( $r=0.41, p<.001$ ),共感的関心と「支援関心」( $r=0.48, p<.001$ ),共感的関心と「知識経験」( $r=0.19, p<.001$ ),共感的関心と「好意意識」( $r=0.33, p<.001$ )で正の相関がみられた。また,仮説 2 を検証するため障がい者との接触頻度(家族,友人,ボランティア,地域の障がい者との接触頻度の総和)についてたずねる項目と多次元共感尺度の相関分析を行ったところ,共感的関心と総合接触頻度( $r=0.15, p<.01$ ),共感的関心と友人の障がい者との接触頻度( $r=0.12, p<.05$ ),共感的関心と地域の障がい者との接触頻度( $r=0.13, p<.05$ )で正の相関がみられた。性差では仮説 1 が男女ともに検証されたが,仮説 2 では総合接触頻度と多次元共感尺度との相関がみられず,男性は家族,女性は友人と多次元共感尺度との相関がみられた。家族の障がい者との接触頻度の高低群の場合,仮説 1 は低群,高群ともに検証されたが,仮説 2 では総合接触頻度と多次元共感尺度との相関はみられず,低群は地域と多次元共感尺度との相関がみられた。また,友人の障がい者との接触頻度の高低群の場合,仮説 1 は低群,高群ともに検証されたが,仮説 2 では低群において総合接触頻度と多次元共感尺度との相関がみられた。

【考察】「仮説 1.共感的関心が高い者は,障がい者に歩みよろうとする傾向が高い」について,障がい者に歩みよろうとする傾向が高い人は,感情的側面を持つ共感的関心と認知的側面を持つ気持ちの想像の共感性を持つことがわかった。この 2 つは多次元共感尺度のなかでも他者志向的な共感性であり,この共感性に該当する者は,自分自身の感情に支配されず,障がい者が何を求めているか受け取ることができるため,歩みよりができるといえる。また「仮説 2.共感的関心が高い者は,障がい者への接触頻度が高い」は,仮説 1 と同様に共感的関心,気持ちの想像が高い者と接触頻度の高さに関係がみられた。この仮説 1 と仮説 2 により,共感的関心と気持ちの想像が高い者と,障がい者に歩みよろうとする傾向と接触頻度の高さは関係することがわかった。性差は多次元共感尺度の先行研究どおり女性の方が男性よりも全般的な共感性が高いことが明らかとなり,男性は共感的関心,女性は共感的関心と気持ちの想像の共感性が高いことがわかった。そして家族,友人の障がい者との接触頻度が低群の方が高群よりも接触頻度について相関がみられ,家族の障がい者との接触頻度が低群において仮説は検証された。これは接触頻度が高い関係にいると共感的関心がうすれ,接触頻度が低群の方は共感的関心が高く,接触頻度が高いと考えられる。

【参考・引用文献】登張真穂(2000)多次元視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究 2000,第 9 巻,第 1 号,36-51